

図説 医学の歴史

坂井建雄 著

坂井建雄先生は多くの医学史研究者が敬愛する存在である。長いこと順大の解剖学の教授であり、解剖学者としての仕事だけではなく、解剖学の歴史を軸とした優れた業績を次々と発表されてきた。チャールズ・オマリーのヴェサリウス研究を『ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス 1514-1564』（エルゼビア・ジャパン、2001）として翻訳したお仕事や、初期近代の解剖の歴史を検討した『人体観の歴史』（岩波書店、2008）などは、非常に重要な日本語の著作である。その坂井先生が『図説 医学の歴史』を出版した。さまざまな意味で、圧倒的な力と有用性を持つ仕事である。

坂井先生が打ち立てたのは「図説の」医学の歴史である。英語のタイトルが“The History of Medicine with Numerous Illustrations”であることが象徴している。歴史上のベーシックな事実、それを示す画像、そしてそれらの堅固な事実を整理して並べた一覧表の集大成である。このような画像や図表は全体で650点以上も集められ、一つひとつ丁寧に検討され、非常に見やすい形で表示されている。画像はカラーであり、医学の歴史が持つヒトや動物の活動が感じられる。とりわけ強力なものが、一覧表となった図表の利用である。著名な医師の著作の一覧表、それらの章立ての一覧表、生理学の概念の一覧表、ヨーロッパの薬草園の300年以上にわたる設立年次の一覧表、日本の医学校の設立年次の一覧表など、さまざまな史実が一覧の図

表となっている。このような画像と図表の集積は、古代から現代までをつないでいくような効果を持つ。大きな図説プロジェクトに基づく書物は、英語のトータルな医学史の書物でも見たことがない。まさに圧倒的な力と有用性である。

一つの限界は、1980年以降に発達した新しい医学史とは大きな距離を置いていることである。新しい医学史は、人文学・社会科学（Humanities and Social Sciences）という医学以外の学問領域を基盤として、複数の視点で医学や医療を検討している。坂井先生はそれを「医療と社会の関わりという新しい視点」とまとめている。これを「社会」という概念でまとめてしまったことに一つの限界があるのかもしれない。「患者」「疾病」が医療や世界とどのように関連するのかという視点は、本書の主題にはなっていない。

しかし、このことは、理想論と比べたときのごくマイナーな点である。坂井先生のご著作は世界でも指折りの名著である。日本の医学史、医師、医療関係者はもちろん、どの領域の研究者にとっても必携の一冊である。

慶大経済学部教授・医学史
鈴木晃仁

B5・頁656 2019年5月
定価：本体5,800円＋税
[ISBN978-4-260-03436-4] 医学書院刊